

地域の人々と進める空家リノベーション その3  
- 地域の人々との協働の記録 -

Vacant house renovation with local people Part 3  
- A record of collaboration with local people -

川本 聖一\*            武部 奈津世\*\*   関 寧\*\*   永井 竜也\*\*  
KAWAMOTO Seiichi   TAKEBE Natsuyo   GUAN Ning   NAGAI Tatsuya

The report describes efforts to promote local produce produced on abandoned arable land. In Saikawashichi, Fukumitsu Town, Nanto City, there are people who use abandoned arable land to grow mountain grapes and make wine. Others make effective use of abandoned arable land to produce pesticide-free rice and tomatoes. We are using a vacant house as a sales promotion facility. The empty house has been renovated into a guest house. You can enjoy wine there. You can eat locally produced agricultural products.

So, to speak, it is a proposal of a guest house with added value. This project will be promoted by university students who will be active in the region in the future. The content of this activity will be widely disclosed in student graduation research. In doing so, the purpose of this study is to create material for similar activities. In 2020, there was the impact of Covid-19. Therefore, it was not possible to start this project from April. However, the renovation work may be completed in December 2020. This report introduces the following items.

- a. Features of Nishifutomi Village, Fukumitsu Town.
- b. A summary of characteristic local produce.
- c. Lighting plan for renovation of an old folk house.

This result will be passed on to juniors. And it contributes to regional revitalization of the Nishifutomi area.

Keywords : Renovation Vacant house Abandoned arable land Fukumitsu Town  
Lighting plan for an old folk house

---

\* 富山国際大学 現代社会学部 教授・博士 (工学)

Prof., Faculty of Contemporary Society, Toyama  
University of International Studies, Dr.Eng.

\*\* 富山国際大学 現代社会学部 学部生 (4年)

Student, Faculty of Contemporary Society, Toyama  
University of International Studies.

## 1. はじめに

### (1) プロジェクトの目的と研究ノート

このプロジェクトは、学生が主体となり、地域の人々と協働して、空家のリノベーションを実際に行って、地域の活性化を行っていく取り組みである。2018年4月からスタートしたこの活動は、3年間の活動として継続している。この間、2棟の空家を改修し、1棟はゲストハウスとして運営、1棟は運営がスタートしていこうとしている。この活動の記録は、研究ノート「地域の人々と進める空家リノベーション その1、その2」として報告されており、今回の報告書は「その3」で、2棟目の空家改修の報告が主となる。学生は主体となって地域で活動することで、地域活性化につながっていくことが、このプロジェクトの目的である。この活動は、教育的な視点、地域活性化という視点、空家問題の解決という視点、高等教育機関と地域の人々との協働という視点など多くの要素を含んだ活動である。この活動は普遍的な側面を持つ活動であり、他のプロジェクトにも水平展開できる。そのため、活動のプロセスを研究ノートに記載して、今後のフィールドワーク活動に有用な資料にしたいと考えている。

### (2) 「地域の人々と進める空家リノベーション その1」<sup>1)</sup>

「地域の人々と進める空家リノベーション その1」の報告においては、2019年2月までの内容であった。南砺市福光町のこのプロジェクトにおいては、測量や家屋調査を経て、関係行政庁へのヒアリング、地域の人たちとの打ち合わせ、計画案の作成、近隣説明、工事開始までの内容を学生が主体的に取り組んだ。このプロジェクトの進行過程において、学生にとっては、社会の最新の動向を知り、社会人とのコミュニケーションを行い、地域問題について実務を通して考えるよい機会となり、地域に役立つ人材として育つなど、様々な利点があることが確認された。一方地域で活動する人々は、若い学生の発想と活動を期待している。学生の活動は、地域で活動するグループに対して、研究成果を提供することにより地域の発展のために寄与することができる。これらの活動を通して、大学生と地域活性化を目指すグループの協働は大変有効であることが確認できた。

### (3) 「地域の人々と進める空家リノベーション その2」<sup>2)</sup>

「その2」ではリノベーション工事と、ゲストハウス運営に向けての準備報告であった。リノベーション工事は2019年12月に概ね終了している。工事の概要は、水廻り、客室を中心とした内装工事、痛みの大きな部分の外装工事である。構造耐力上の性能低下を起こしているため、1階の柱を増設、1階板張りの部分の床は下地から改修、漆喰壁施工にあたっては、下地の不陸が表面に出ても不自然でないように手塗で施工、土壁の補修には透明のシーラー材で剥離防止、階段は経費節約のため既存階段使用、などが特徴的な工事であった。完成したゲストハウスにおいては、1階を地域の情報を発信するギャラリーとしている。ここでは、宿泊者に向けて物作りが体験できるスペースとなった。ゲストハウスの来訪者の関心を引く展示物として、麻布の歴史パネル、福光町で唯一機織りが出来る方「聞書き」の冊子、学生が作成した機織り機のマニュアルをパネルとして展示した。また、福光町の歴史、伝統、観光について、このまちを訪れた人がより興味を持てるようなパネルを作成し展示した。また、福光町のガイドマップを作成した。これは、実際に学生が町歩きを行い、飲食店14店舗と土産物屋16店舗を記載する店舗としてリスト化しまちを紹介するものである。このマップは、ギャラリーはもとより、近辺の公共施設に設置された。ゲストハウスのオープン

は2020年1月となったが、2019年12月22日には、関係者を招いて内覧会を行った。内覧会の来訪者にアンケートを取ったが、概ね、ゲストハウスは好評であり、古民家を改修していること、麻布織体験ができるということを来訪者は高く評価している。学生が参加したこのプロジェクトは、予想通りメディアに多く取り上げられた、我々教育機関や地域の方々の活動を上手くアピールできた。このようなプロジェクトを実行できたのは、事業主体である「カーサ小院瀬見」という存在があつてこそ可能であつた。空家を地域活性化に活かして行く今回のような取り組みは、「カーサ小院瀬見」のように、主体的に行動を起こす、個人やグループが必要であることも再認識された。

## 2. 「地域の人々と進める空家リノベーション その3」オ川7プロジェクト

### (1) オ川7プロジェクトの目的

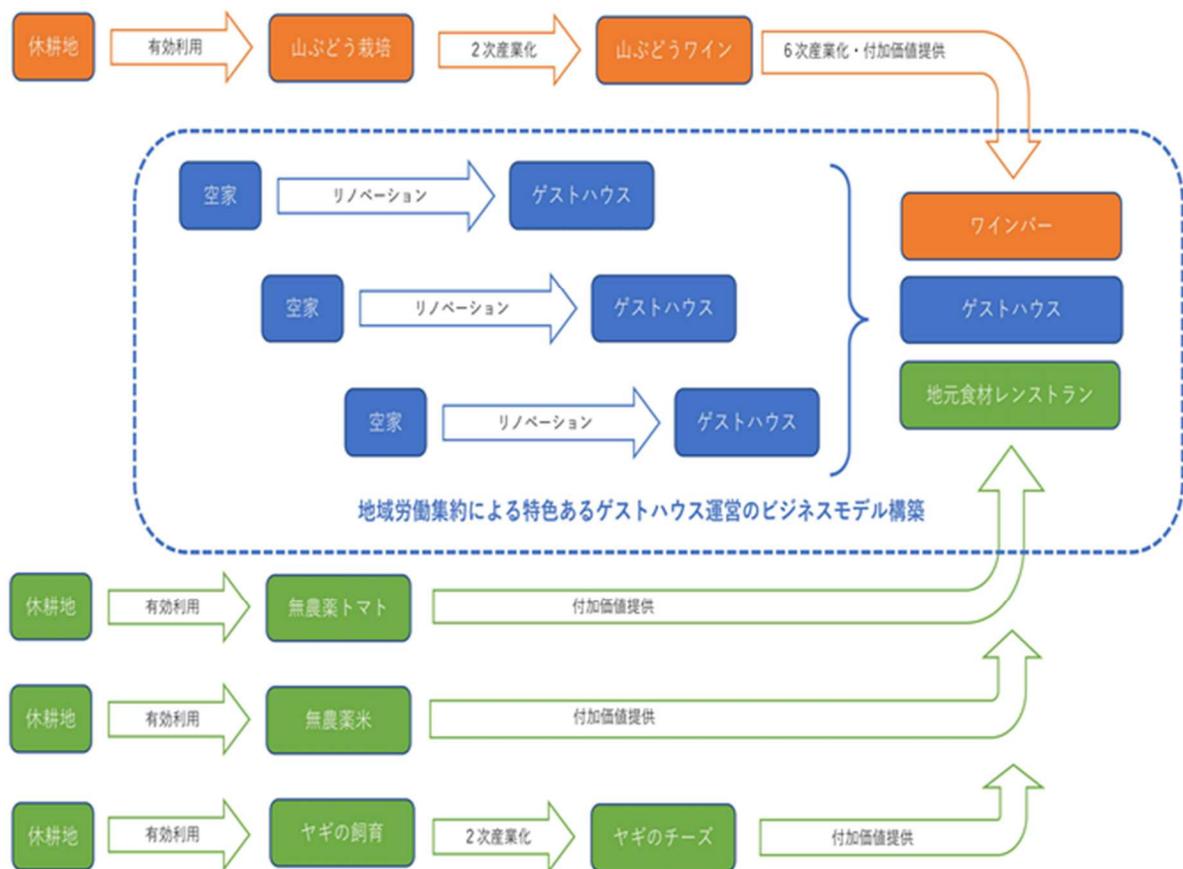


Figure 1 特色あるゲストハウス

「地域の人々と進める空家リノベーション その3」では、南砺市福光町西太美地区のオ川七において、休耕地を活用して山ぶどうを栽培し、それを利用してワイン製造を行い、販路を構築するといういわゆる地域農産物の6次産業化の推進を行うものである。また、山ぶどうワイン以外にも、休耕地を有効利用した無農薬米、トマト、ヤギのチーズの6次産業化も視野に入れている (Figure 1)。具体的な販路の構築として、地域に残る空家を有効利用して、ワインが楽しめて、地域で製造された農産物を用いた食材が提供できるゲ

ストハウス開業し、地域労働集約による特色あるゲストハウス運営のビジネスモデルを構築するプロジェクトである。

将来地域で活躍することが期待される大学生が協働で、地域の活性化のために活動する。この活動の内容は学生の卒業研究や研究成果報告のような情報公開の場で、広く公表され、同じような問題を抱える地域の活動の一助になって行くことを狙っている。

## (2) 山ぶどうワインの6次産業化

「西太美地域協議会」は、耕作放棄地を農地に開墾すべく設立され、山ぶどうに着目し2016年から山ぶどう苗を植えて、試行錯誤が始まった。2018年には、福井県大野市のワイン工場の協力のもと400本の純粋な山ぶどうワインを製造された。このワインは「もったいない」という意味の「ATTARAMONNI (アッタラモーニ)」(Figure 2)と命名された。しかし、ワインの情報発信や販売促進を行える施設が地元には乏しい。それが行える場所として、ワインバーを併設するゲストハウスを開設する。この取り組みは、いわば、山ぶどうの栽培からワイン販売までを地元で行う6次産業化を試みる取り組みとなる。



Figure 2 ATTARAMONNI (アッタラモーニ)

## 3. 地域調査・地域の人々の活動調査

### (1) 南砺市福光町

南砺市は富山県の南西部に位置し、北部は砺波市と小矢部市、東部は富山市、西部は石川県金沢市、南部は1000mから1800m級の山岳を経て岐阜県飛騨市や白川村と隣接している。平成16年11月1日に8つの町村(城端町、平村、上平村、利賀村、井波町、井口村、福野町、福光町)が合併し、南砺市が誕生した。

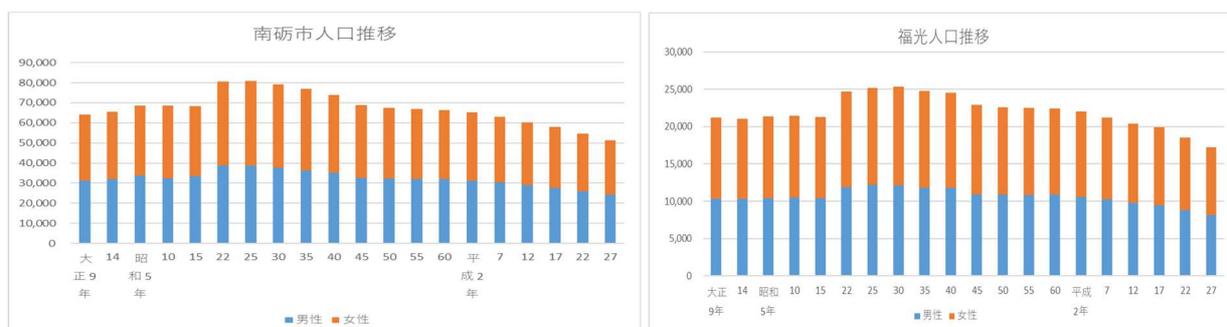


Figure 3 南砺市と福光町の人口推移

平成7年にユネスコ世界遺産に登録された「五箇山の合掌造り集落」をはじめ、「麦屋節」や「こきりこ」などが有名である。そんな南砺市の中にある福光町の人口は、南砺市全体と同様に、昭和30年をピークに徐々に人口減少している。15～64歳の生産年齢人口の減少が大きく、進学や就職をきっかけに福光町を出ていく人が多いと思われる（Figure 3、Figure 4）。

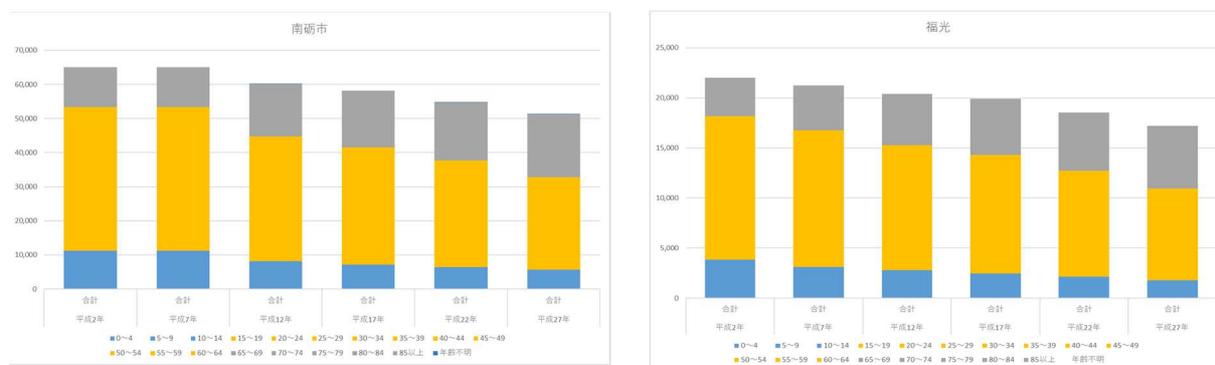


Figure 4 南砺市と福光町の人口推移（年齢構成別）

(2) 福光町西太美地区才川七

西太美地区の年表を Table 1 に示す。西太美地区は784年、泰澄大師が真言密教を広めるために医王山48カ寺を開いたことが起源とされる。泰澄大師は白山開山をした僧で、正権寺跡、香城寺惣遺跡などの寺跡が、医王山48カ寺を開いた際の遺跡として残っている。井波町宇野家所蔵の「慶長年間越中国図」（1596年～1615年）に記載されている太美郷区分には、現在の西太美地内の地名を、小院宣見（小院瀬見）、西川（才川七）、小二俣（小二又）、長沢、幸常寺（香城寺）、古館、石坂と記載している。また、「越中国図」には、幸常寺村（香城寺）、浅谷村（広谷）、古館村、西川村（才川村）、石坂村、長沢村、ふと村（ふと谷）、小二俣村と記載されている。これらの村が1619年頃に合併し、才川七村となる。1889年西太美村が誕生し、1952年に町村合併により「福光町」が誕生し福光町の中に入った。そして2004年の合併で南砺市となり現在に至る。

Table 1 西太美地区の歴史

西暦	出来事
784	泰澄大師が真言密教を広めるために医王山48カ寺を開いた
1390	この頃才川城が築かれた
1619	この頃才川の7つの村が合併し才川七村となる
1870	才川七村は町村制の実施により太美郷16村の中に入る
1889	西太美村が誕生する（小院瀬見・才川七・土生・嫁兼の一部・小二又・天池出・南広谷・糸谷新・香城寺）
1907	養蚕が盛んになり繭糸の揚辺をはじめ
1915	小学校で養蚕をする
1952	町村合併により福光町が誕生
2004	合併で南砺市となる

西太美地区にとって、ひとつの象徴とも言える医王山は、昔から大切な山として親しまれていた。ひとつは衣食住との関係である。薪を取り山菜を食し薬草を摘み、木材を利用して家を建てたりすることは現在でも続いている。もうひとつは信仰との関係である。医王山を「行の山」「佛の山」「哲学の山」などと呼び、

気高く尊厳な山だと考える人も多い。西太美地区は、前述したように泰澄大師が医王山 48 カ寺を開いたことが起源とされている。そのため、正権寺跡や香城寺惣堂遺跡などの寺跡が、医王山 48 カ寺を開いた際の遺跡として残っている。

### (3) 「西太美地域づくり協議会」へのヒアリング

2020年10月7日、西太美交流センター (Figure 5) にて、「西太美地域づくり協議会」地域指導員の Y 氏から西太美地区についてヒアリングした。西太美地域づくり協議会は令和元年4月1日、「西太美自治振興会」、「西太美公民館」、「西太美地区社会福祉協議会」の3つの組織がひとつになり「西太美地域づくり協議会」となった小規模多機能自治組織である。西太美地区は福光地域の西側に位置し (Figure 6)、医王山の山麓にある。主な観光地はイオックス・アローザスキー場、富山県福光射撃場。1年を通してイベントを開催しているので地元民や石川県からの観光客が多い。



Figure 5 西太美交流センター



Figure 6 西太美地区の位置

西太美地区は1952年に福光町と新設合併、2004年に合併で南砺市となった。合併特例債の資金を利用し色々と施設を建設したが、今ではその施設の維持管理が重荷になっている。住民の特性は、遠慮深く、まわりを気にする人が多いということである。農業をする人が多く、助け合って生活を送っている。協議会としては安心して暮らせる地域の構築を目指しているとのことであった。地域おこし支援隊員を募り山間地域の整備を行い、高齢者や障がい者も安心して暮らせる体制を目指している。また、共同活動を通じ、人と触れ合い安心感のあるまちにするよう取り組んでいる。

自然や文化遺産を活かし伝えるために、史跡の見学道や案内板など環境整備を行っている。そのことにより、地区内外の人たちに西太美を知ってもらい、興味を持ってもらう活動も行っている。活力ある地域にするために、体験研修・民泊などにより地域内の人材を育成することにも取り組んでいる。また、移住に力を入れていて、空き家情報を収集し希望者に提供し、空き家サポーター登録制度も設けている。移住体験ツアーを積極的に行い、移住希望者を受け入れ、地域外との交流を図っている。近年ではこの成果があり、若者の移住がすこしずつ増えて来ているようである。今後は、高齢化による農業の担い手不足と人口減少、環境や観光といった田舎の良さを残しつつ、IT などを取り入れてみんなが暮らしやすいまちにしたいということであった。

(4) 移住者からのヒアリング

3年前に横浜から家族で移住した女性の話を聞いた。彼女は昔から田舎に住みたいと思っていて、ご主人が高岡市出身だったのが西太美に来るきっかけとなった。西太美地区の移住体験ツアーに参加して、住民の皆さんが優しく人との距離感が近かったところに惹かれて移住を決めたそうである。西太美地区に移住してよかったことは、田舎ならではのせまいコミュニティが助けとなっているとのことであった。子育て中は、一人でいるよりも人と関わりたいので、近所に誰かがいてくれるという安心感があるという。何よりも、話せる人がいることが一人じゃないと思えてうれしく、ありがたいということであった。また、この地域では四季がしっかりしているので、それぞれの季節にあわせて仕事があること、旬がしっかりしていて食べ物おいしいことも魅力だそうである。ここでの生活で大変なことは、冬の雪であり、豪雪のときは除雪が大変で、湿度が高くカビが生えやすいことや、車がないと交通が不便であると話していた。

(5) 西太美地区の人口予測

西太美地区は人口減少と少子高齢化が進行している。そこで、西太美地区の人口と世帯の人口予測を行った (Figure 7)。人口は、現行の出生率を前提に、移住者がいる場合といない場合をシミュレーションした。2010年の国勢調査を基に、2060年の人口予測を試みた。2010年時点の出生率が続けば50年後には人口が約10分の1にまで減ることがわかる。とくに0～14歳の年少人口の割合が2040年から0になり、少子高齢化も深刻である。このままではまちが衰退していく未来しか見えないので、一刻も早く対策を立てる必要がある。



Figure 7 西太美地区の人口予測 注1)

次に、5歳～10歳の子ども1人を持つ3人家族が毎年2組移住してくることを想定した予測をしてみる (Figure 8)。2010年の国勢調査と2060年の国勢調査をみると、50年で人口減少を半分までに抑えられることがわかる。また人口減少を止めることは出来ないが、減少傾向は緩やかで、2040年頃から老年人口の割合よりも生産年齢人口の割合のほうが高くなる。このことから、高齢化を防ぐことが出来る考える。小

学生人口も、移住者が入ることで2020年から小学生人口を維持し続けることが出来、少子高齢化を食い止めることが出来ると考えられる。このように、1年に子供を含む2世帯が移住してくることで人口減少を止めることは出来ないが減少を緩やかにすることが出来る。また、年少人口、生産年齢人口の割合が増えるので少子高齢化を食い止めることができ、まちの衰退を防ぐことが出来る。



Figure 8 西太美地区の人口予測 (2家族移住) 注1)

## (6) 地域の活動調査

本プロジェクトでは、地域の人々が取り組んでいる3つの食材を取り上げて、それを活用して地域活性化に結び付けようとしている。以下にこの3つの活動の調査内容を示す。

### 山ぶどうワイン

10月9日、地元産のワイン「ATTARAMONNI」の製造に取り組んでいる農業組合法人「医王の恵み」理事の山本隆一氏を訪ねヒアリングを行っている (Figure 9)。耕作放棄地を利用した山ぶどうの生産の経緯や、現在リノベーションを進めているゲストハウスを利用しての、農業の6事業化に向けての構想を打ち合わせた。ゲストハウスの敷地では、山ぶどうから取れる農産物を加工する作業所を併設する予定である。また、近接する山ぶどう畑も視察した。このワインの名称は福光地方に伝わる懐かしい方言「あつたらもんに (もったいない)」に由来する。山ぶどう100%のプレミアムワイン「ATTARAMONNI」である。山本氏によれば、最初にワインに興味があったので、ぶどうの木を栽培することにしていた。平成5年には、栽培の参加者が高齢者であることや、人たちが高齢化していることなどから、参加し続けるのは難しいということで、ボランティアを募集して活動を存続させた。平成28年には、他の地域での技術導入など行った。平成

29年の冬には、豪雪のために山ぶどうが全滅したこともあったそうだ。平成30年から、山ぶどうワイン「アッタラモーニ」を販売した。価格は3300円で販売している。Table 2は山本氏らの活動をまとめたものである。



Figure 9 農業組合法人「医王の恵み」ヒアリング

Table 2 山ぶどうワインの開発の経緯

年	出来事
きっかけ	ぶどうの木を持っていて、趣味でワインを作っていた。
平成5年	所有者が高齢で継承が難しいので有志を集めて本格的に始めた。
平成27年	山ぶどうを地域活性化に繋げるために本格的に栽培を開始した。
平成28年	専門の先生に教えてもらう
平成29年	豪雪で山ぶどうが全滅した
平成30年	山ぶどうワイン「アッタラモーニ」を販売した
令和2年	去年の4倍の1600本を出荷し、精力的に市場に売り込んでいる
令和4年	地元産100%のワインを目指している

### 無農薬トマト

無農薬トマトを生産している「粟土舎」は、南砺市福光地区の太美山で農薬、化学肥料、除草剤は一切使用せず、土・水・風を基とした自然環境を大切に活動をしている。粟土舎の代表栗野秀氏は入善町に生まれ金沢の町中で育った。小学生の理科で学んだ世界の環境問題に関心があったとのことである。その後富山大学で生物学を専攻している。卒業後は農業を志し、石川県の羽咋市とJAが主催の自然栽培塾や様々な有機栽培の勉強会に参加する。その後、石川県の無農薬農家2軒で2年半の研修生として農業に関する知識を身に付けた (Figure10、Table3)。



Figure10 「粟土舎」ヒアリング

Table 3 無農薬トマト開発の経緯

	出来事
きっかけ	栗野秀さんは農業に関する知識を勉強して、趣味で自然栽培を作っていた
平成29年	耕作放棄地だった地面をお借りしてビニールハウスを建た
平成30年	トマトの作付けをはじめた
平成30年	無農薬トマト「粟土舎」を販売した
今後展望	リーフレット冊子やホームページの作成する
	無農薬栽培農家の紹介、販路の共有で販路の拡大する
	農産物配送の負担軽減や地域資源活用堆肥製造販売の取り込みなど

平成 29 年から耕作放棄地だった土地を借りてビニールハウスを建て、平成 30 年よりトマトの作付けをはじめた。平成 30 年、はじめて販売（県内外の直売所、スーパー、飲食店・個人客）ができるようになった。今後は、仲間たちと循環型有機農業を営む生産者協力グループ組織を立ち上げる計画をしている。具体的には、販売促進のためのリーフレットやホームページの作成、無農薬栽培農家の紹介、販路の共有で販路の拡大、農産物配送の負担軽減や刈り草、落ち葉などの地域資源活用堆肥製造販売など、色々な取り組みをしていきたいとのことであった。

### 無農薬米

渡辺吉一氏は元々JA に勤めていたが、除草剤が原因で色んな虫たちがいなくなっていることを知り、農薬を使うことに疑問を持った。そして、15 年程前に自宅用の米を無農薬米にしたことからスタートした。定年になったら、更に面積を広げ無農薬の田んぼを始めようと決めていた。もともと南砺市出身で、定年後、太美山地域で無農薬栽培を本格的に始めた。また農業体験の受け入れも積極的に行っている。耕作放棄地は自然栽培に適していると語る。10 数年前から南砺市に熊が出没しはじめ、循環型里山を守るためにも、耕作放棄田での自然栽培による米づくりの有機犠牲を語る。平成 27 年、耕作放棄となった水田約 1.3ha で自然栽培米に取り組みはじめた。彼の農場は「なべちゃん農場」というネーミングで、コシヒカリの玄米を使って栽培している。高台の澄んだ湧き水が入るこの環境は、無農薬・自然栽培で「環境に優しい安全な米づくり」実現できる理想的な場所である (Figure11 Table4)。



Table 4 無農薬米開発の経緯

出来事	
きっかけ	農薬を使うことに疑問を持って、15年程前に自宅用の無農薬米を作っていた
定年後	更に面積を広げ無農薬の田んぼを始めようと決めていた
10数年前	循環型里山を守るために耕作放棄田で、自然栽培による米づくりをはじめた
平成27年	自然栽培米に取り組みはじめた
平成27年12月	「奇跡のリンゴ」の木村秋則氏の指導による「のと里山農業塾」を受講した
平成28年11月	修了された

Figure11 「なべちゃん農場」ヒアリング

## 4. 空家リノベーション

### (1) 建物調査と打ち合わせ

2020 年 6 月、建物の現況調査（建物は 100 年を経過している）を行い、敷地の大きさと高低差、接道の状況、建物の形状と大きさ、建物の傷み具合、屋外給排水設備の状況など、建物に関する情報を整理した。調査した状況に基づき、大学の授業で用いている CAD を使用し学生が図面を起した (Figure12, Figure13)。

この図面を用いて地域で活動する「カーサ小院瀬見」からリノベーションプランの要望をヒアリングしている。2020 年 7 月、ヒアリングに答える形で、学生から以下の提案を行っている (Figure14)。

- ① ワンバー廻りの提案 (Figure15)
- ② インテリアイメージの提案 (Figure16)
- ③ 照明計画の提案 (Figure17)

学生は自分たちで考えたイメージをまとめプレゼンテーションを行った。「カーサ小院瀬見」代表の堀氏からは、概ね了解が得られた。

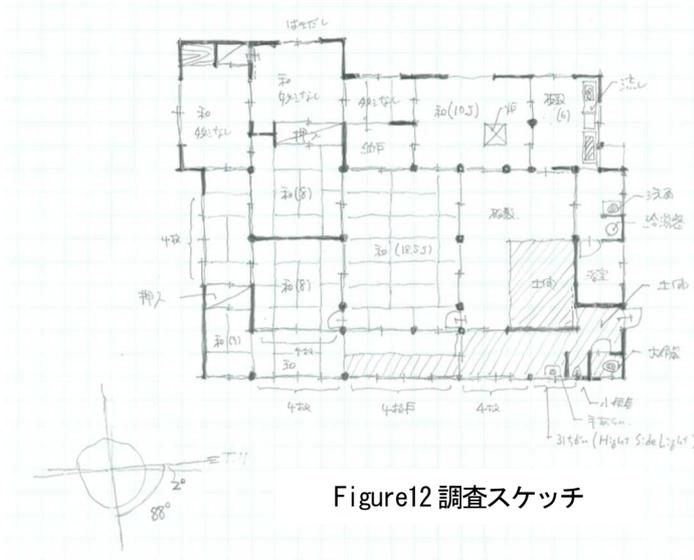


Figure12 調査スケッチ

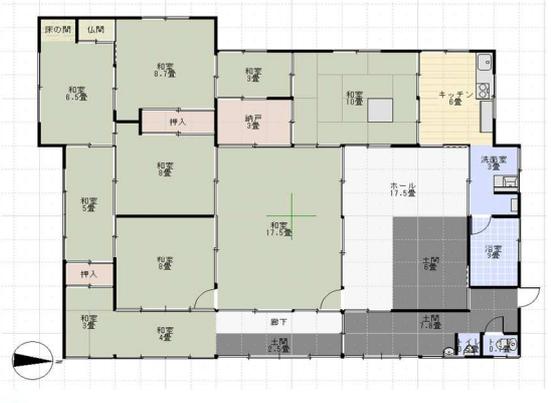


Figure13 打ち合わせ用図面



Figure14 ヒアリング調査とプレゼンテーション



Figure15 ワインバー廻りの提案



と、築150年の古民家であること、学生が発表した案で内装デザインを決めたことが掲載された。報道機関が何に反応するかを知ることができた。今後の広報活動の参考にする (Figure18、Figure19)。



Figure18 インテリアイメージの提案



Figure19 インテリアイメージの提案

(2) リノベーション工事

2020年11月、建具(障子)の補修と障子紙張りから工事がスタートし、年内に概ね工事は終了した。工事完了時の主な写真を (Figure20) に示す。また工事費用の概算金額を (Table 5) に示す。ワインバー、キッチン、洗面脱衣室、トイレの内装工事は主な項目である。照明工事は内制化を行ったので、低い金額に抑えられている。

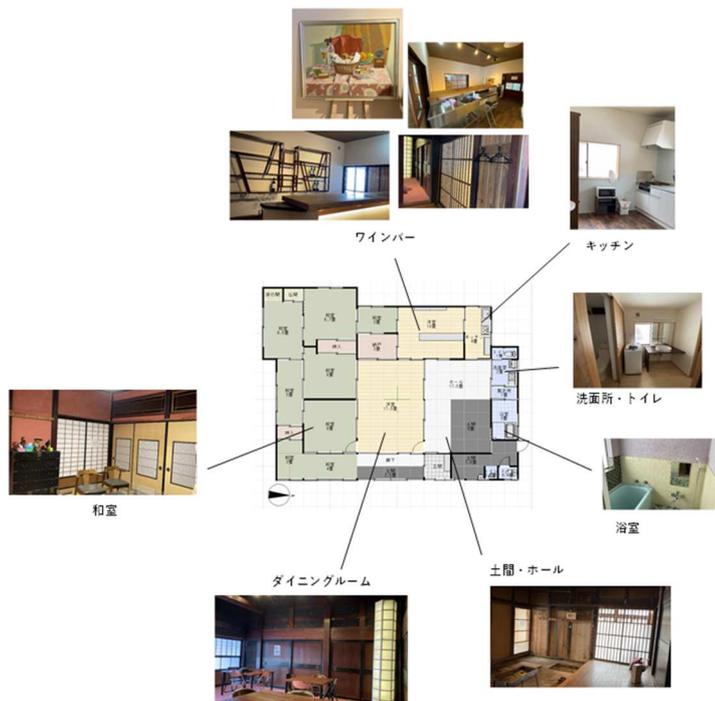


Figure20 竣工状況

工事項目	費用
大工	1,710,000
内装	660,000
配管	660,000
電気	210,000
板金	210,000
厨房衛生	610,000
家具	450,000
エアコン	100,000
ワインセラー	80,000
看板	200,000
絵	100,000
照明	300,000
合計	5,290,000

Table 5 概算工事費

(3) 照明計画

ワインバーの計画においては、奥にある窓は塞いで、外光を取り込まずに部屋の照明のみでワインバーの雰囲気を演出することに決定して計画を進めた。また、窓があった場所にはワインラックを設置し、間接照明を設置することとした。改築後のワインバーではカウンターの上に照明を設置し、2席に1つの間隔でダウンライトを設置した。ダウンライトを設置することによってワインバーの雰囲気に合った落ち着いた空間を演出することができた。またライトの間隔を空けることによって隣の席との空間を分けるような演出を意図した。カウンターに設置する照明は調光可能なものを選び、カウンターの照明が当たる箇所を細かく選べるようにするなど、学生が企画し進めていった (Figure21)。

ワイン棚の間接照明の設置方法としてワインを置く天板の種類によって間接照明の設置個数が変化してくる。天板が光を透過しない木板などの場合間接照明を下から当てても光は透過しないので、天板が3段構造などの場合は、各天板の上から光を照らす形になる。天板がガラスのような光を透過するタイプの場合一番下の天板から間接照明の光を照らすことによって1つの照明器具で一度に上段部分まで光を透過できるような提案を行った (Figure22)。



Figure21 ワインバーの照明

Figure22 ワインガラスラックの照明

リノベーションをする古民家の外観にスポットライトを設置する計画のため、実際に必要な個数を決定するには検証を行った。建物からの距離と角度によって建物がどのように見えるか検証した。照明は省エネルギー性を考慮し、ソーラーパネル式の15m照射型のスポットライトを使用した。建物からの距離を1.5m離し、照射角度を0°と45°のものとして3.0m離れた時の照射角度0°と45°で検討し、3.0m離れた位置から45°の角度に決定した (Figure23)。



Figure23 外部スポットライト計画

リビング部の天井照明においては、古民家であるという特性上、天井部分の古板や汚れが目立ってしまう。そこで、照度計を用いて、リビングとして照度を確保し、天井の汚れ等を目立たなくする天井スポットライトの照度を検討して調整した。程よいグレアによって天井の汚れを隠す効果があることを発見できた (Figure24)。最終的に使用した主な照明と価格を (Figure25、Table 6) に示す。



Figure24 汚れを隠す照明計画

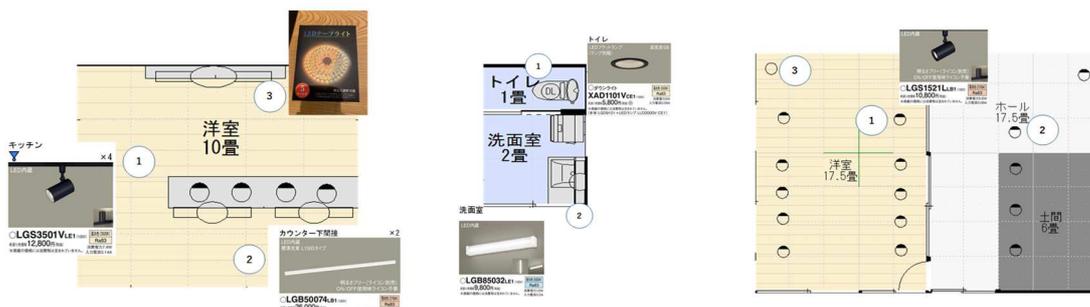


Figure25 主な設置照明

Table 6 主な設置照明の個数と価格

品番	メーカー価格	設置箇所	設置個数
XAD1101VCE1(100v)	5,800	①	1
LGB85032LE1(100v)	9,800	②	1
合計金額	15,600円		

品番	メーカー価格	設置箇所	設置個数
LGS3501VLE1(100V)	12,800	①	4
LGB50074LB1(100v)	26,000	②	2
ZH112	1,980	③	1
合計金額	105180円		

品番	メーカー価格	設置箇所	設置個数
LGS1521LLB1(100v)	10,800	①	10
LGS1521LLB1(100v)	10,800	②	5
合計金額	162,000円		

この建物は農家として使用されていたので、農機具が保管されていた。その中の1つである「ころがし」という農機具(田植えの時に、苗を等間隔に植え込むための器具)に学生たちは障子紙を張り込み、照明を仕組んでスタンド照明として使用することにした。途中の作業工程と完成品を Figure 26 に示す。



Figure 26 「ころがし」をスタンドとして使用

(4) ゲストハウスプロモーション

ゲストハウスに来た宿泊客に、より西太美地区のことを知ってもらうために、西太美地区を紹介するパネル(Figure27)、山ぶどうワインを紹介するパネル(Figure28)、無農薬トマトと無農薬トマトのパネル(Figure29)を作成した。西太美地区を紹介するパネルでは、西太美地区の歴史と行事、人口と移住、観光地について紹介している。それぞれの内容にQRコードを貼り、興味を持った方が詳細を調べられるようにした。このパネルを通して、このまちの魅力と少子高齢化、人口減少が深刻であることを知ってもらい、一人でも多くの人が移住や観光に興味を持ってもらうことが目的である。これらのパネルは、ワインバーのあるゲストハウスに掲示する予定にしている。



Figure27 西太美地区を紹介するパネル



Figure31 西太美地区を紹介するパネル



Figure32 無農薬トマト・無農薬米

## 5. まとめ

2020年は新型コロナウイルスの影響により4月から空き家リノベーションプロジェクトを開始することが出来ずにいたが、年内に無事に形にすることが出来た。対象とした西太美地区においても、移住対策は待ったなしの状況にある。現在西太美地区では移住体験ツアーをはじめとする移住者対策を行っており、近年では若い世代からの移住が増えているようだ。移住体験ツアーでは住民の方々とも触れ合うことが出来るので、移住先で問題となる住民の方々との付き合い方、コミュニティの維持が双方で確認できる。今後の我々の活動に是非取り入れていきたい。この地域では、西太美地域づくり協議会をはじめとする行政やCasa小院瀬といった地域活性化のために働いているグループが率先として動いている。このようなグループの存在の有無が地域活性化できるかどうかを決める。

西太美地区には、医王山やイオックス・アローザスキー場といった観光資源も豊富であることも分かった。ゲストハウスを運営する上で、このような観光地が近くにあるのは有益である。特にイオックス・アローザスキー場は県外からも観光客が来るので、日中はスキー場で楽しんで夜はワインバーで地元特産物を楽しむといった観光地と連携したプランも立てられる。来年度のこのプロジェクトは、それらの資源を活用して、ゲストハウスをどのように運営していくかという段階に入る。今後は南砺市保健所でワインバーの営業許可をもらい、2021年4月にはワインバーをオープンさせる予定である。

この報告書は工事完了時点での報告となり、ワインバーのあるゲストハウスがどのように地域活性化に貢献してゆくかについての報告はできていない。工事完了時点において、それぞれ担当した学生は、自分の個性を生かし以下についてまとめてくれた。

- ① 福光町西太美地区の特性
- ② 特徴ある地元農産品のまとめ
- ③ 古民家改修における照明計画

今後はこの結果を利用して、ゲストハウスの営業プロモーションにつなげてゆきたい。またこの内容を後輩の学生に引き継いで、西太美地区の地域活性化に結び付けたい。

## 謝辞

本研究は、2020年度「とやま呉西圏域調査研究事業」の研究助成を受けた。また、協働して進めてくれた「カーサ小院瀬見」の方々には大変お世話になった。付記して敬意を表す。

## 参考文献

- 1) 地域の人々と進める空き家リノベーション その1 - 地域の人々との協働の記録 -, 富山国際大学 現代社会学部紀要
- 2) 地域の人々と進める空き家リノベーション その2 - 地域の人々との協働の記録 -, 富山国際大学 現代社会学部紀要
- 3) 「古民家にワインバー」, 『富山新聞』, 2020年9月6日, 朝刊
- 4) 「福光活性化へ古民家バー」, 『北日本新聞』, 2020年9月6日, 朝刊

## 注

- 注1) 名古屋大学大学院附属持続的共発展教育研究センター提供、「小地域ごとの簡易人口推計ツール」によりグラフを作成した。